

平成26年（第8回）みどりの学術賞 選考委員会委員長コメント

平成26年（第8回）みどりの学術賞の選考にあたり、選考委員会は、「みどり」に関する学術に造詣の深い学識経験者等約450名に対し、この賞にふさわしい候補者の推薦を依頼しました。その結果、約60名の推薦が得られましたが、分子・細胞レベルで植物の営みを研究している方から、地球規模で生態系の研究をしている方まで、実に多様な分野からお名前が挙がりました。

選考委員会は、推薦のあった方々の業績を慎重に検討した結果、最終的に2名の方が受賞にふさわしいとの結論に至りました。

お一人は、植物生理学の分野で、ジベレリンが、細胞質表層微小管の配向調節を介して、細胞の成長方向を決めるセルロース繊維の方向を制御していることを解明されるとともに、植物形態形成、細胞分裂制御機構においても国際的に高い研究業績を挙げられた柴岡弘郎博士であり、もうお一人は、緑地学の分野において、植物・植生の機能を群落レベルで捉える応用植物社会学研究の成果を踏まえつつ、地域の歴史的・文化的背景や社会経済条件をも含めた統合概念としての「景域」を永続的で美しく健全に保全する自然立地的土地利用計画手法の確立に多大の貢献をされた井手久登博士であります。

今回の受賞者お二人の研究は、極めて優れた業績であるとともに、いずれの研究も我々人間が「みどり」を深く理解し、それをどのように活かしていけばよいか、その道筋を示された研究として高く評価しました。選考委員会を代表し、両博士の永年にわたるご貢献に対し、心から敬意を表するとともに、このような「みどり」に関する学術が新たな知恵をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待し、念願するものであります。

平成26年3月13日

みどりの学術賞選考委員会委員長
杉浦 昌弘